

公園計画における住民参加の事例とその効果

西田 宏

都市計画部門 ランドスケープグループ 次長
E-mail: nishida@shinnihon-cst.co.jp



酒井 陽介

都市計画部門 ランドスケープグループ
E-mail: sakai@shinnihon-cst.co.jp



Key Words: 公園計画、住民参加、ワークショップ、合意形成、個性、有用性

1. はじめに

近年、少子高齢化など社会構造やライフスタイルの変化に伴い、公園に求められるニーズが多様化している。その多様化した住民ニーズを的確に捉え、整備に反映させるために、ワークショップ（以下、WS）を通じて、計画段階から住民が参加する、ということが全国で行われている。しかし、富山県ではまだ実績が少なく、定着していないのが現状である。

ここでは、WS手法を用いて公園の計画を行った富山市の朝菜町公園の事例を紹介するとともに、WSの効果、課題について考察を行う。

2. 公園及びWSの概要

(1) 朝菜町公園の概要

朝菜町公園の概要は以下の通りである。

所在地：富山市堀川町

敷地面積：約 1.9ha

公園種別：近隣公園

周辺用途：第一種低層住居専用地域

(2) WSの概要

①参加者・形式等

参加者は17名で、自治振興会長や町内会長、学校関係者、スポーツ関係、長寿会関係、防犯関係、緑愛護関係など、多様なニーズを反映できるよう様々な分野から参加を依頼した。

この17名を5～6名を1グループとする3グループに分け、グループごとに検討を行う形式とした。

②全体の流れ

公園計画におけるWSは、一般的に4回1セッ

トとして行われるが、今回は全3回として進めた。

第1回：イメージを形にしよう

(コンセプトと導入施設)

第2回：ゾーニング計画をまとめよう

(ゾーニング計画)

第3回：計画図を確認しよう

(配置計画、施設計画)

WSは1箇月ごとに開催するものとし、1回の開催時間は約2時間とした。



図-1 ワークショップの様子

③住民へ情報公開

WS開催ごとにニュースレターを作成し、町内に回覧した。これによりWSに参加しない住民に対しても情報を公開し、透明性、公平性を高めた。



図-2 ニュースレター（第2回懇談会）

3. 住民参加 WS による効果

今回の WS を通じて、実際に見られた効果としては以下のものがあった。

① 個性ある公園計画

従来のように設計者と行政だけで機能・施設の優先順位を考えると、どこの公園も同じものとなり易いという問題点があった。今回、WS の中で議論しながら住民自らが優先順位を決めるプロセスを経た結果、設計者と行政が予想していた優先順位とは異なるものとなった。事実、この公園の最大の特徴は、公園中央の丘に配置した「シンボルツリー」と「時計台」であるが、これは住民からの発案であり、他の参加者からも広く賛同を得ていた施設である。このような「優先順位」＝「何に重点を置くか」が個性、地域性につながるものであり、今回の計画ではこれが反映されたものとなった。

② 早期の課題抽出

住民ならではの情報やその場で生活しなければわからない問題点が早期に抽出することができた。これは今後スムーズに事業を進めるに当たって重要なことであった。実際に、計画段階でこれらが解決できたことにより、その後の設計段階では、新たな課題の発生による修正や追加要望による変更がほとんどなかった。

③ 住民による課題解決

今まで行われてきた住民ヒアリングや地元説明会等では、住民からは要望のみが出され、その対応を取捨選択するのは行政側であった。WS では、各要望に対して住民同士が議論を行うことで、叶えるべき重要な意見は自らで問題を解決して実現し、実現が難しい要望や必ずしも皆が望まない要望は、最終的には淘汰された（パークゴルフコースの導入）。今回は、住民の意思・要望を的確に反映できたという面でも、WS の有用性が確認できた。

④ 参加者の意識の高揚

WS の参加者が、よりよい公園にするために考え、理解しようとすることによって、確実に個々の関心が高まってきたと感じられた。計画への関心の高まりは、今後の整備、運営、管理への参画につながるものである。住民の意識の高まりについて

は確認することはできなかったが、ニューズレターによる広報や WS 参加者を通じた情報提供から、関心の高まりは期待できる。



図-3 基本計画イメージパース

4. 今後の課題と対応

今回は、計画段階の合意形成プロセスとして WS を行ったものであるが、今後、長期に事業が継続していく中で、計画段階で醸成した公園への関心が薄れてしまうことが懸念される。今後は、この公園への関心を如何に維持していくかが課題となる。

高い関心を維持するための対応としては、今後継続する設計・施工の各段階で継続的に住民が参加するプログラムを用意することである。また、同時に参加者の対象を広げ、関心のある住民は誰でも参加できる仕組みづくりを行う必要がある。これらを通じて、最終的には住民自らが管理・運営を行い、公園をコントロールしていくことが望まれる。

なお、先ごろ弊社で行った実施設計では、施工段階での住民参加プログラムを提案し、実現に向けて調整を行っているところである。

5. おわりに

今回の事例からも計画段階において住民が参加し、合意形成を図ることの有用性が確認できた。朝菜町公園のような住区基幹公園では、利用対象とする地域がある程度限定されていることから、WS 手法等を用いた住民参加は比較的容易であった。今後は、広域な事業を含む様々な事業について住民参加の手法を確立するとともに、富山県内においても幅広く展開されることが望まれる。